

見えないものはないに決まってるだろ！

～神の存在証明

越 川 弘 英

奨励者紹介[こしかわ・ひろひで]

同志社大学キリスト教文化センター教授

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(礼拝、宣教、牧会)

昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうかわか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。また、婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。この婦人たちは、イエスがガリラヤにおられたとき、イエスに従って来て世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた。

(マルコによる福音書 15章33—41節)

談志の言葉

「見えないものはないんでしょうか、って聞かれたから、『ないよ。情熱は見えるよ。怠惰も見えるよ』って言ってやったんだ。おれは見えないものはないと思ってる」。

これは今は亡き落語家の立川談志が語った言葉です。20年か30年も前に、たまたまラジオで耳にして、記憶に残っている言葉です。

情熱は見える。

怠惰も見える。

おれは見えないものはないと思ってる。

ずいぶんあっさりしたものの言い方ではありますが、確かにそうだなと感じました。

今学期のチャペル・アワーのテーマは、「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます」という聖書の言葉です。実を言えば、これだけではいったい何を言っているのか分からないというのが正直なところでしょう。

このコリントの信徒への手紙二の文脈によれば、この「見えないもの」とは、どうやらキリスト教における「救い」とか「神によって与えられる栄光」とかいったものを意味しているようです。この言葉は、そうしたものは「見えない」、でもそれは大切なものであって、その後の「見えるものは過ぎ去りますが、見えないも

のは永遠に存続するからです」という言葉に繋がっていくのです。

「見えないものが大切」、「見えないものは永遠に存続する」などと言うと、談志風に言えば、「見えないものはないに決まってるだろ!お前はアホか!」と怒鳴りつけられそうな気がします。

存在するなら見えるはず。

大切なものなら見えるはず。

目を注げば見えるはず。

「見えないものに目を注ぐ」なんて、完全に自己矛盾の言葉でしかありません。

今日はそのへんのところを、とくに「神」という目に見えないとされているものをどうやって見るか、果たして見るができるのかということを中心に考えてみたいと思います。

サン＝テグジュペリの世界

さて、聖書と同じようなことを記している文章があります。

「いちばんたいせつなことは、目に見えない」。

サン＝テグジュペリの書いた『星の王子さま』（河野万里子訳 新潮社 2006年）という童話の一節です。愛読者の方もいるかもしれませんが、私もサン＝テグジュペリは好きな作家で、高校生の頃に彼の小説を読んでいろいろ考えたことを覚えています。

ところで、サン＝テグジュペリのこの「いちばんたいせつなことは、目に見えない」という言葉の前には次のような文章が出てきます。

「とてもかんたんなことだ。ものごとはね、心で見なくてはいくよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」。

サン＝テグジュペリが言っているのは、「心でよく見ろ」、「深く洞察せよ」ということです。そうして、心を込めてよく見ることによって、「見えないもの」を見よ、見えるようになれということなのです。ということはつまり、談志と同様、「いちばんたいせつなことは、目に見えない。でも、それは、ほんとうは見えるし、見えるようになることがたいせつなのだ」ということに繋がっていくと、私は思っています。

サン＝テグジュペリは1900年に生まれたフランスの作家であり、職業的な飛行機乗りだった人です。作品数は少ないのですが、発明されて間もない初期の飛行機乗りとしてのさまざまな実体験に基づいた、そしてそれに哲学的な省察を加えた含蓄の深い小説を残しています。第二次世界大戦中、彼はナチス・ドイツに占領されたフランスを解放するために飛行少佐として従軍し、1944年、南フランスへの偵察飛行中、撃墜されて亡くなりました。

『星の王子さま』の中でサン＝テグジュペリは、人間にとって大切なものとは、私たちが手を掛け時間を掛け、そして心を傾けて育んだ何ものかとの結びつきであるということを強調しています。そうした結びつきは人間と人間の間の関係であることはもちろんですが、その人が育てた一本のバラとの関係においても、一匹のキツネとの関係においても同様です。この童話に登場するキツネが言います。

「でも、もしきみがぼくをなつかせたら、ぼくらは互いに、なくてはならない存在になる。きみはぼくにとって、世界でひとりだけの人になる。ぼくもきみにとって、世界で一匹だけのキツネになる」。

「なつかせたもの、絆を結んだものしか、ほんとうに知ることはできないよ」。

「きみのバラをかけがえのないものにしたのは、きみが、バラのために費やした時間だったんだ。(中略)人間たちは、こういう真理を忘れてしまった。(中略)でも、きみは忘れちゃいけない」。

サン＝テグジュペリの生前最後の作品となった『戦う操縦士』(堀口大学訳 新潮文庫 1956年)という作品の中にも、次のような言葉が出てきます。

「僕が一身を献げてこそ、初めて僕はその者に結び附くわけだ。僕が味方となってやる者だけしか、僕には理解が出来ないわけだ」。

サン＝テグジュペリが記した「心で見なくてはよく見えない」という言葉は、おそらく相手と深く関わること、「一身を献げて／結び附く」ということを含んでいるのだと思います。「心で見る」というのは、相手を詳細に観察するような態度を意味するものではなく、相手を自分の「味方」として、仲間として、大切な存在として認め、その相手と関わること、そしてそのような交わりをとおして見えてくるもの、現れてくるものに気づくということなのでしょう。

イエスと出会った人々

さて、今日読んでもらった聖書の物語に目を転じます。ここには十字架につけられて死んでいくイエス、それを見ていた人々、ローマ軍の百人隊長、マグダラのマリアをはじめとする女性たちが登場します。

ある意味、聖書というのはとても正直な文書で、キリスト教において救い主と信じられているイエスに関してすら、同時代人の中にはそれと正反対にイエスを悪魔の手先だと考えていた人々もいれば、他人の家に入り込んで飲み食いするだけの「大食漢で大酒飲みだ」(マタイによる福音書11章19節)と非難する人々もいたということを伝えています。

イエスが十字架で処刑されたということは(神学的な解釈はともかくとして)、歴史的に言えば、イエスに敵対した人々がいて、その人々がイエスを殺したということです。他方、同じ時、同じ場所にイエスを「神の子」と信じ、イエスと深い結びつきを保ち続けてきた人々もいるのです。

イエスが神の子だったのか、悪魔の仲間だったのかということは、なかなか難しい問題です。イエスが当時のユダヤ人の社会と宗教を激しく攻撃した人だったことは事実ですから、既存の価値観や秩序を守ろうとした人々からすれば、彼が悪魔に見えたとしても不思議ではないところがありました。

「イエスはいったい何ものなのか」という問いは、その人自身がイエスとどんな関係をもつか、どんな結びつきをもつか、あるいはもたないかということによって、180度変わってしまう問題だったのです。

「なつかせたもの、絆を結んだものしか、ほんとうに知ることはできないよ」。

「僕が一身を献げてこそ、初めて僕はその者に結び附くわけだ。僕が味方となってやる者だけしか、僕には理解が出来ないわけだ」。

実際、宗教にはそういう一面があって、自分が主体的に参加することによってしか知りえない真理、気づきえないリアリティが確かに存在します。そういう意味では、宗教の世界には信じる者だけが見ることのできるものがあって、信じない人や傍観者からすれば、怪しいもの、疑わしいもの、まやかしと受け取られても仕方がない部分があるということも事実なのです。

今回の聖書の場合で言えば、それはすなわち、イエスと深く結びついた人々だけが、イエスは何ものかということ「ほんとうに知る」ことができるということを意味しているわけですね。反対に深く結びつくことをし

なかった人々の目には、イエスは別の存在として映ったということなのでしょう。

それぞれの「信仰」と「真理」

ところで、宗教に限らず、私たちは自覚するとしないうちに問わず、それぞれ自分なりの価値観やものの見方といったものをもって生きています。それは「広い意味におけるその人の信仰」と言っているのではないかと思います。人は皆、何らかの「私の信仰」をもって生きています。それはつまり、たとえ無意識であれ何であれ、皆さんの人生の土台となり方向づけとして作用するもののことです。

私の場合は、何はともあれキリスト教徒ですから、「私の信仰」をキリスト教という既存の信仰体系に照らし合わせて考えたり判断したりするわけですが、無宗教を標榜する人々の多い日本の場合、「私の信仰」というのは自分自身で決めた何らかの個人的な価値観やものの見方に基づいて形作られたものになるのではないかと思います。

そうした「私の信仰」というのは、一見すると「自主自立の信仰」、その人だけのオリジナルなもののようにも見えます。しかしあえて言えば、皆さんが「これは私個人の信念である、価値観である、人生観である」と考えるものの多くは、実はこの時代と社会の既存の価値観に追従しているだけだったり、SNSなどの情報のコピーにすぎない場合も多々あることは覚えておく必要があります。そしてその時代や社会の価値観や情報が正しいかどうか、ほんとうにそれが「真理」であるかどうかということは、決して自明なことではありません。

「私の信仰」が「真理」であるかどうかなんて別に気にしていない、とりあえずそれで間に合っているからいいんだ、という考え方もあるかもしれません。しかし、聖書に「真理はあなたたちを自由にする」(ヨハネによる福音書8章32節)とあるように、裏返して言えば、「真理ならざるものに従う」ことは、詰まるところ、私たちの真正の「自由」をそこなうものであり、「真理ではない信仰」は、詰まるところ、私たちが本来そうあるはずの「ほんとうの私たち自身」から疎外するものであることを覚えておいてほしいと思います。

先ほどのサン＝テグジュペリの言葉を逆にもじって言えば、「真理というのはそんなにかんたんに目に見えるものじゃないよ」ということになるでしょうし、だからこそ、「よく見なければいけない。心で見なければいけない」ということになるのでしょう。

神の存在証明～参加する真理

さて今日は最後に、そうした「真理」ということを考えていく上で、キリスト教におけるもっとも基本的な問題、そしてそれだけに反面から言えばもっとも難しい問題でもある「神の存在」ということに触れてみたいと思います。

「神の存在証明」は古くから神学の世界で論じられてきた問題でした。聖書、とくに旧約聖書では、神は見えない存在であるとされています。談志風に言えば、「見えないものはないに決まってるだろ!」ということになります。またサン＝テグジュペリに言わせれば、「とてもかんたんなことだ。ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」ということになります。

神は見えない。しかしよく見れば見える。神を直接見ることはできないけれども、間接的に見ることはできると私は思っています。したがって、神の存在は間接的に証明できるというふうに私は考えています。

神を間接的に証明するもっとも重要で単純率直な方法は、神を信じて人生を送った人々の存在を見つけることです。もし神が存在しなかったならば、おそらくそのような生き方をしなかったであろう人々が、神を信じ、神と深く結びついたことによって送ることになったそれぞれの人生が、キリスト教の神の存在を指し示す、もっとも優れたもっとも説得力に満ちた証言であると思うのです。

そのような証言者たちの原点に立つ存在こそがイエスであり、その弟子やパウロをはじめとする2000年のキリスト教の歴史に登場する有名無名の数知れぬ人々こそ、神を証明する生きた証言です。

そうした無数の証言者たちのひとりに、わが同志社の創立者である新島襄も含まれています。

「僕が一身を献げてこそ、初めて僕はその者に結び附くわけだ。僕が味方となってやる者だけしか、僕には理解が出来ないわけだ」。

新島が、文字どおり一身を投げ打って日本を脱国し、アメリカに渡り、その地でキリスト教とそれに裏打ちされた文化、社会、そして人々と出会ったことが、同志社の発端となったことを私たちは知っています。見えない神を信じた新島が、141年前にこの学校を見えるかたちで創立しました。見えない神が見える結果を生んだのです。

同志社がキリスト教に基づいてこの地に存在し続けるかぎり、そしてその精神に基づいて私たちが学び、教え、働き、生きるかぎり、それは神の存在を間接的に指し示す証言となります。皆さんは自分が神の存在証明に関わっているなどとは思ってもみないかもしれませんが、これは事実なのです。

新島が学び、そして証ししている「見えないけれどもたいせつなもの」とは、神という存在にとどまらず、真理、希望、愛、そして良心と、数え上げればきりがありません。

キリスト教に拠って立つこの同志社において、私たちが、神、真理、希望、愛、そして良心といった「見えないもの」、しかし「いちばんたいせつなこと」を正しく洞察し、身につけることができるように祈りたいと思います。そしてそうした「たいせつなこと」と深く結びついて生きることをとおして、私たちが本来そうあるはずの「ほんとうの私たち自身」へと近づくこと、また私たちがこの世に対して「たいせつなこと」を証しするものとなることができますように、重ねて祈りたいと思います。

2016年11月30日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録